学校におけるいじめの社会的背景

――人間疎外状況のなかの子どもたち――

今西康裕

はじめに

一九八五年にその発生件数の上でもピークに達した感のあった子どもたちのいじめは、教師・生徒に「いじめは大変なことなんだ」という問題意識が浸透するにつれ、その後は統計上の数字ではかなり急激に激小し、「いじめは沈静化した」とする認識が広がっていた。[1] しかし、最近再びこのいじめ問題が新聞紙上をにぎわせている。このことは、いじめという現象が潜在化しやすく、実際の数字が統計に表れにくいということを示すとともに、[2] いじめが教師や生徒といった学校内部だけの問題ではなく、深く現代社会に根ざした病理現象であるということをあらためて証明することとなった。

つまり、いじめは子どもたちの間のいざこざであり、大人社会とは関係のない子どもたちの問題であるとする態度ではその本質的解明は不可能なのである。現代社会のなかで意図的あるいは無意図的な社会化の過程を歩む子どもたちは、「時代を映す鏡」といわれるように、その価値観においても、大人社会のもつそれを反映している。「子どもの社会が汚れなく、純粋無垢なものでどんな価値判断からも自由であるということはなく、むしろ純粋であるからこそ社会の価値観を無批判的に受け入れている」のである。[3]

また、高校生に対するある調査結果では、「今の世の中は金やものを重視するので、心の豊かさがおろそかにされている」、「今の世の中には自分のことばかり考えて他人のことに無関心な人が多い」と考える者が調査対象の半数を上回っ

た。[4] ここからも、現代という時代を背負い、しかもこの現代社会というものを厳しく見つめている子どもたちの姿がうかがわれよう。

そこで、本稿では、子どもたちを広く「現代社会のなかの子どもたち」としてとらえ、時に人として当然の権利である「生きる」権利さえをも奪う、かれらの今日的な人間関係の病たるいじめ問題にアプローチしてゆきたい。

一、いじめの分析的視角

今日のいじめが、現代社会状況に下支えされたものであるとしても、これを直接に一本の因果関係で結びつけることはできない。さまざまな原因－結果の束が複雑に絡まりあって、いじめという一つの現象を生じさせているのである。そして、いじめの本質的解明、根本的解決のためには、それらの一つ一つを丹念にひもといていくことが必要なのは言うまでもない。

しかし、ここでそれらすべてを行うことはとうてい不可能であろう。そのため、ここでは、考えられるいくつかの分析視角を提示し、さらには、「孤独」や「他人志向型人間」などをキーワードとして現代社会と子どもたちのいじめ問題とをつなぎ、今後のいじめ分析の軸としたい。

なお、論を進めるにあたって「いじめ」の概念規定が必要であるが、いじめという現象は、いじめられる側の主観的世界に基礎をおいているだけに、外部から客観的に一義的な定義づけを行うことは難しい。基本的にここでは、「集団内で優位者となった単独または複数の特定人が、絶対的勝算のもとで、同一集団内の単独または複数の弱者に対して、かれらが身体的心理的苦痛を与えられたという被害感情をいだくような行為を反復継続的に行うこと。」と規定したい。また、「子ども」という概念も、人間のどういう側面のどの段階までの状態を指すものかあいまいであるが、ここでは、教育の場たる学校におけるいじめの問題をとりあげることもあり、高校生以下の学齢期にある人間の総称として用いることとする。

さて、いかなる学問においても、それが人間による人間のためのものであるかぎり、根源的でありかつ究極的なものは、「人間とは何か」という人間性への問いかけであろう。こうした観点に立てば、いじめの問題に関しては、「いじめる」という行為の奥底にある人間の攻撃性について探求の目を向ける必要がある。すなわち、K・ローレンツのいうように、（人間の）攻撃的要因は生に役立つものであり、それらは外

部の刺激によって起こる反作用ではなく、放置しておいても自然に人間の内面からあふれ出す衝動である、とするなら、子どもたちのいじめも人間として不可避なものであり、人間の一種の「業」となろう。フロイトにおいても、死の（諸）本能〈タナトス〉の位置から考えると、人間が自己破壊の衝動から身を守るためには、何か他の物あるいは他の人間を破壊しなければならないのではないかと考えられ、ここでも攻撃性は、人間という有機体の構造に根ざした、絶えずあふれつつある衝動となる。しかし、アメリカの社会心理学者ドラードは、精神分析学の概念を学習理論の概念に置き換え、刺激＝反応理論を基礎とした独自の人格形成理論・精神療法理論から、人間の攻撃性は、欲求不満と外的な抑制力との関数として表れるという「欲求不満－攻撃性の仮説」を主張し、攻撃性の本能説に否定的見解を示した。また、E・フロムも、フロイトを基礎としながら、人間の攻撃性は本能的なものであるとする説を否定する。彼によれば、人間には生命の脅威に対する防衛的攻撃〈良性の攻撃〉以外の攻撃〈悪性の攻撃－残酷性・破壊性〉のメカニズムは系統発生的に組み込まれておらず、この悪性の攻撃は、本能ではなく、人間存在の条件そのものに根ざした人間の潜在的可能性であって、人間社会が文明化と共に発達させた性格に基づく。つまり、生物学的にバイオフィリアの能力（愛、連帯、正義といった「生命増進の症候群」を形成してゆこうとする傾向）を与えられた人間は、それがさまざまな環境的要因によって阻害されたとき、それに代わってネクロフィリア（生命あるものを死へと変貌させる情熱）を志向するようになる可能性を持っている、とするのである。そして、現代社会こそが、こういった可能性が実現するための肥沃な土壌が準備されている社会であると警告する。

以上のように、人間の攻撃性に関する諸説は、それを本能であるとみなすか否かによって大きく二つに分かれる。近年の人類遺伝学や行動科学の研究結果では、それは種の保存や進化にとって不可欠の機能であり、また遺伝的かつ内因的自発的性格を有する本能的行動であることが示されている。しかし、たとえ人間の攻撃性が本能的行動であるとしても、私たち人間には、この本能を抑制し、「理性的存在」たらしめている精神の営みがあろう。だが、現代社会においては、フロムが指摘するように、こうした精神の営みをかき乱し弱体化させる諸要因が多く存在し、人々の性格をより好戦的なものとしているということはできる。[5] 本稿の基本的認識もこれであり、そこからさらに現代社会へ考察の目が向けられる。

また、いじめという現象が、日本という文化的風土のもと

で起こっており、他の諸外国以上に社会問題化しているという事実を踏まえれば、これに文化論的アプローチを加えることも必要となろう。従来、日本では、集団における成員個々人の幸福や欲求充足は、運命共同体たるその集団全体の安寧が保証され、繁栄が達成されたときにはじめて与えられる、とする集団主義的な価値志向が優位を占めてきたが[6]、このことは学校教育の場にも反映されており、そこでは教科学習の時間のみならず、例えば、学級活動やクラブ活動等の特別活動の領域においても他人との協調的行動を重視した集団活動が制度化されている。学校におけるあらゆる教育活動において、協調的行動の機会を制度化し、自発的協力の態度や役割同一化、集団への帰属意識などといったいわゆる日本的集団主義を構成する諸要素が奨励されるのである[7]。そのため、子どもたちは、他人に敏感となり、過剰な同調的行動をとりがちとなる。そして、興味・関心、学力や体力など何らかの点で集団から上下・左右いかなる方向にはみ出す者に対しても、「集団に融合することは、社会や学校が求める制度的要請である」という正当化された理由をもっていじめがなされやすいのである。したがって、いじめられる側も、それをただ単なるいじめっ子からのいじめとはとらえられず、社会や学校全体からの制裁であると受けとめてしまい、個人的価値と集団的価値の不一致によるより深い葛藤に悩むこととなる。

また、日本人には、将来の成功のための現世内での我慢、満足の延期は美徳であるとする民族的性格がある。これとこれまた日本人に根強い学力崇拝主義（学力水準の高い人は人格的にも優れた人である、との観念）が結びつき、親をして自らの子どもを受験戦争へ参戦せしめ、幼児期からの早期教育の隆盛をもたらしたとは考えられないだろうか。そこでは根性論が金科玉条とされ、学習時間が長ければ長いほど学力は向上する、と信じ込まれて疑われない。だが、受験勉強にしても早期教育にしても、そこで重視されるのは与えられた課題の反復練習であり、その結果として生み出されてくるのは、ここでもまた主体性や創造力といったものを欠いた、他律的な他人志向型人間なのである。

なお、以上に展開してきたように、日本文化論のなかでいじめをとらえる場合には、何に比べて「日本的」なのか、誰から見て「日本的」なのか、ということに留意する必要があろう。従来の日本文化論あるいは日本人論は、欧米との比較により日本「独持」の特性や異質性を強調してきた。欧米を基準として特定の思考や行動様式が「日本的」だと定義される傾向にあったのである。しかし、より詳細な文化論的アプローチをおこなうためには、アジアなど非西欧圏地域との比

較検討を加えることが重要となろう。特に、いじめなどの学校教育に関する問題では、近年日本以上に受験戦争が激化してきたと言われる近隣のアジア諸国との対照が必要とされ、そこからより厳密な「日本的」特性が探求されなければならない。

さらに、今日の学級集団におけるいじめを一層多角的に考察するためには、それを空間軸と時間軸のうえに位置づけることが肝要であろう。上述した文化論的アプローチは、他国との比較という点で、いじめを空間軸上に位置づける試みの一つであるが、その他にも、職場や地域社会など学校外の大人社会におけるいじめや、学校内でも部活動などで見られる「しごき」などのいじめと類似の行為との比較検討は有意味であろう。また、今日のいじめは、旧来に比して「残酷で執拗で陰湿なものとなった」と言われるが、これを検証するために、例えば戦中期の疎開児に対する地元の子どもたちのいじめなどと今日のいじめを対照的に把握することも必要となるだろう。いじめは、人間の文化のなかではかなり普遍的に起こっている現象なのである。また、同じ学齢期の子どもと言っても、小学生と高校生とでは心身の発達段階も異なり、いじめの内容も当然違ったものとなる。[8] そのため、いじめ分析の際には、それぞれの発達段階における子どもたちのいじめの諸特徴を段階別に個別的にとらえ、これらを踏まえた上で総括的な究明をおこなうべきであろう。ともあれ、空間軸によるにしろ時間軸によるにしろ、比較という分析手法を用いる場合には、それはただ単に二つの事象の差異を示すだけに終始してはならない。その目的が、いじめならいじめという現象の本質的解明を目指したものであるなら、二つの事象の表層的な差異の奥にある根本的同質性にこそ目を向ける必要があるのである。その他にも、かつていじめに直接被害者または加害者としてかかわった経験をもつ人々に、彼らの人権を考慮しつつ、現在という時点から当時の状況を回想してもらい、その時の心情やその「いじめ体験」がその後の彼らの人生にどのような影響を与えたかを主観的に叙述してもらうということもいじめ分析の一助となろう。

二、現代社会における人間

子どもたちの間にいじめという深刻な問題を引き起こした現代社会とはどのような社会なのだろうか。ここでは、今日のいじめの背景となった現代社会状況に焦点が合わされる。

高度に発達した資本主義経済体制は、大衆消費社会の到来を可能とし、巷に物や情報を氾濫させた。人々の欲求はとど

まるところを知らないかのように無限の拡大を続け、これを満たすためには激烈な競争に打ち勝たなければならない、という意識が広がった。さらに社会関係の機会的合理化が著しく進行し、人々のゲゼルシャフト的結合が優位となったのである。

このように、諦めることを知らない「煽る」文化装置だけが充実した現代社会のなかで[9]、人口は増加し、人口密度は高まったが、人と人との間の「心理的」距離は拡大し、孤独感や無意味感・無気力感が人々を襲うようになり、人間らしい生活を捨てた代価としての「もの」の豊かさ（物質的豊かさ）から人間らしさを探求する「こころ」の豊かさ（精神的豊かさ）への転換、「人間性」の再考が叫ばれるようになった。つまり、本来自己実現の場たる職場においても、ますます技術革新が進行し、さらには経済合理性を追求した極度の分業体制の確立、官僚制の発達などによって、労働はますます非人間化したものとなった。また、産業構造の変化などから、地域社会など中間集団の機能低下、都市的生活様式の大衆化に伴う家族の紐帯の脆弱化といった現象が現れ、一方ではマス・コミュニケーションの飛躍的な発達によって類似環境が創出されるなど、総じて人間が社会集団関係、とりわけ家族、地域社会、職場などといった基本的な生活集団のなかで、自己の居場所や自己確認をおこなうのが難しい社会的疎外の状況が生じたのである[10]。

三、現代社会のなかの子どもたち

人々は激しい競争を繰り返しながらも他から疎外され、一定の目的を達成するために最も有効な手段を効率的に使用するが、その行動の目的そのものについては何ら反省することも自覚することもないという、主体性を喪失した「陽気なロボット」と化した[11]。生活上の社会的な矛盾・問題は、個々の家庭や個人のうちに絶えず個別化し内閉化して「不幸の個別化」の構造を形づくるようになった[12]。そして、これらの影響は当然子どもたちの世界にも及んだのである。また、現代の急激な社会変動の過程で価値は多元化し、「何がいいもので何が悪いものか」が不透明となり、この絶対性の崩壊と高い相関度を示して家庭・学校教育の機能障害が進行したのである[13]。

日常的生活経験として社会から疎外を体験する現代人は、最後の救いの場を家族に求め、マイホーム主義の態度を示すようになる。しかし、このことは、子どもたちを周囲の自然的・人的環境から隔離し、家庭で彼らを囲い込みこむことと

なり、かれらが外的なものから様々な体験を得たり、それらと諸関係を取り結ぶ機会を失わせる。その結果醸成されてくるのは、他人の事など顧みない自己中心的な価値意識であり、かれらは徹底した利己主義的態度や思考をとるようになるのである。また、近年の核家族化した家庭のなかでは、子どもたちは近親者の死と直面する機会は少ない。このことがかれらの死生観を歪め、歯止めのきかない、暴力的ないじめを生みだす一因となっているとは考えられないだろうか。また、少産化の傾向により母子の密着が進むとともに、逆に女性の就業機会の増加などにより子どもとの直接的接触の機会を減少させた母親が、自らは精神的な豊かさを求めながら、その子に対しては物質的豊さばかりを与える、といった状況が生じ、ここでもまたともに子どもたちの人間、特に家族以外の他者の理解といったものを困難にしている。さらに、戦後の民主主義的風潮の台頭のなかで、教育は特権から権利、権利から義務へと変化し、学歴さらには特定の学校歴が階層間移動のための主要な道具となり、その形式的平等性が、意図せざる結果として実質的な社会的不平等を再生産する過程において、大人たちの間には、精神的豊かさは不可欠としながらも、「まず受験戦争に勝ち、社会的に高い地位について高収入を得なければ、本当の幸福は得られない」という、偏狭な優勝劣敗思想が根づき、子どもたちを学歴という新たな属性を獲得するための強固な競争体制のなかに組み込んで、かれらの人生における選択肢を貧弱なものにしたということは周知の事実である。また、経済主義の教育への浸透によって、学校には効率的な知識伝達、目的合理的な児童・生徒管理のための厳密な校則や規則がもうけられ、子どもたちの生活の細部までをも規定している。ここにおいて、子どもたちは家族に私有された「子ども」であるとともに、学校に専有された「児童・生徒」となり、何かにチャレンジする意欲や、主体的な規範意識を発達させることを阻害され、外側からの規律によってしか自分を律することができないという受け身的、他律的な性格を形成することとなるのである。[14]

四、スケープゴードとしてのいじめられっ子

このように、現代の子どもたちは、競争と管理によって自己の確立ができず、この自己のなさが、ともかく学歴という肩書によって自分を証明しよう、認めてもらおうという意識を生み、受験戦争をより激化させるという悪循環のなかで、他者との親密な人間関係をも欠いているために孤独感に悩むのである。

また、子供のみならず人間は、本来、関数のグラフ上の一点のように、社会的地位などによって人々を差異化し、上下関係を明確にする序列軸（Y軸）と、上下の別なく等しくかかわりあえる同輩軸（X軸）とをあわせもつことによって、自己の存在を確認することができるが、今日のような徹底した管理・競争体制のもとでは、こうしたX軸は極めて得がたいものとなり、その結果、人々は自身の存在をはっきりと認識できず、不安定感を覚える、と言い換えることもできる。

そして、人間の深層を容易に表面化させる文化装置としての子どもたちは[16]、そのX軸たる横のつながりを求め模索を繰り返すが、前述したように、そうした人間関係を取り結ぶ術をかれらは習得しておらず、ついには同じ学級集団内の仲間をスケープゴードとして、共同していじめるという行為のなかで、うわべたけの「偽りの連帯」を形成するに至るのである。

したがって、かれらの凝集性は弱く、何らかのささいな要因によって、いじめっ子がいじめられっ子に転化したり、その逆のケースも考えられるという、立場のいれかわりの可能性も高い。そのため、子どもたちは常にお互いに牽制し合うようになり、他人志向的な性格をより強めるのである。また、いじめる側のいじめる理由として多い「相手に悪いところがあるから」や、最近の異常なまでの潔癖感の反映ともいえる「あの子は汚いし、汚いものはうつるから」という反応も、自らの立場を正当化するためのいじめの引き金、誘因にすぎず、いじめ現象をひき起こしている素因としては、やはり現代社会における過度の管理・競争体制から子どもたちがうける圧迫感・孤独感を挙げることができよう。

五、いじめ克服に向けての諸課題

以上に見てきたように、子どもたちのいじめは、現代社会が内包するさまざまな矛盾や欠陥、病態が集約的に子どもたちの世界に露呈したものと考えられる。そのため、その責任の所在を、学校や家庭などの単一の空間に求めるといった悪者探しでは根本的解決にはつながらない。また、社会全体に責任があるとしながらも、自分一人だけではどうしようもないという諦観に支配されたのでは、結果として状況は何ら改善されず旧態依然のままであることも火を見るよりも明かである。今日の長期化・粗暴化したいじめを見聞するにつれ、さらに今後の国際化の進展にともない、海外帰国子女や外国人労働者の子どもたちが、その異質性をことさらに強調されて、新たないじめの標的となるのではないかという危惧の念

は強まるが、子どもたちは、いじめというネガティブな行為をとおして、大人たちに対して、また現代社会に対して警鐘をうち鳴らしているのであり、そこでは私たち一人一人の生き方、価値観が問われているのである。

そのためには私たちは、各人の自覚に基づいて、これまでのような受動的・他人志向的な生活を様式を改め、自らの人生における価値や理想、目的といったものを積極的・主体的に追求し創造するという自律的な姿勢を求められるだろう。[16] そして、その上で、いじめを生み出す学校をめぐる諸環境を抜本的に転換するための社会的・物的条件の改革を目指した合意形成の運動を、教師－生徒間の信頼関係を基本としながら、家庭・地域社会・学校が三位一体となって進めていくことが必要であろう。[17]

また、近年のエコロジーブームのなかで、自然と人間との共生が叫ばれているが、まずその前に私たちは、自らの自律性を確保するとともに、他者の多様性を認め、本当の意味での人と人との共生をはかるべきであろう。それが、いじめなどを生む精神の貧困を解消する有力な手立てだてともなろうし、人々が真の豊かさを感じることにもつながるのである。

おわりに

本稿ではあえていじめの現場である教室から距離をおいた考察を試みた。それは、全体を通じて一貫している、「いじめはもはや学校内だけの対症療法的なとりくみでは解決できない、現代社会に根ざした病理現象である」との認識からである。そして、その過程で、いじめの本質的究明・根本的克服のためには、まさに多角的な、例えば、教育学や心理学、社会学、さらには神経生理学といった様々な学問分野の学際的研究の成果を結晶させる必要があることを痛感した。また、それとともに、象徴論に陥らず具体的な問題の解明や対策に寄与するためには、やはり、子どもたちの現実の日常生活の大部分を占める学校での子どもたち同士、子どもたちと教師との相互行為をより詳細に分析することも重要であることを再確認させられた。

さらに、本稿では言及できなかった点として、同じように現代社会というものをその背景にもつ教育病理現象においても、登校拒否（不登校）や校内暴力など、いじめの他にもその発現形態は様々である。これらといじめとを比較研究することによって、それぞれの現象がもつ独自性が明らかになる

とともに、それぞれが共通してもつ現代という時代の病理性を明確にすることも可能であろう。

これらをふまえて、いじめに対しさらに包括的なアプローチを今後も試みていきたい。

註

(1) 一九九一年三月二十七日付、『朝日新聞』朝刊

(2) あるイギリスの政治家が、「ウソには三種類」あり、その三種類とは「…ウソ、大ウソ、そして統計」と述べた如く、いじめの実数が把握し難いのは、ここに挙げたように、いじめ自体の潜在化しがちという性向と共に、いじめの事実を学校や教育委員会が、体面を考え過小報告するケースも存在するため、全国的な統計の信頼性に問題を残すということが考えられよう。(一九九一年一月十六日付、『朝日新聞』朝刊「社説」参照)

(3) 江原裕美「『教育の国際化』とは何か」『教員養成セミナー』一九九一年二月号　時事通信社　六六頁

(4) 一九九一年八月十六日付、『朝日新聞』朝刊「天声人語」

(5) 例えば、子どもたちにより身近で直接的な話題として、コンピューターゲームで子どもの性格が攻撃的で周囲に対して競争心や敵意を抱きやすい「タイプA」と呼ばれる性格に傾きやすいという、心理学者らによる調査結果がある。(一九九一年十一月十二日付、『朝日新聞』夕刊) これによると、コンピューターゲームをしない子どもでは調査対象全体の男子一三・三%、女子七・五%にしか「タイプA」の性格が見られないのに対して、毎日する子どもでは男子で全体の二一・六%、女子も同一九%が「タイプA」と性格判断された。また、その他の子どもでもコンピューターゲームで遊ぶ頻度が上がるほど「タイプA」の割合が増える傾向にあったという。

(6) 内野達郎、J・C・アベグレン編著『転機に立つ日本型企業経営』中央経済社　一九八八年　六六―六七頁

(7) 恒吉僚子「文化と社会構造―日本人論の比較社会学的考察」『思想』一九九二年一月号　岩波書店　六一―六四頁

(8) 文部省調査「生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について」(一九九一年十二月発表) によれば、いじめの内容として、小学校では、「冷やかし・からかい」と「仲間はずれ」が上位一、二位を占め、中学校では「暴力」と「冷やかし・からかい」が、高校では「暴力」と「言葉での脅し」が上位一、二となっている。また、中学校段階までは上位五位までにみられる「持ち物隠し」といういじめの形態は、高校では上位五位までに入っていない。これらのことから、年齢が上がるとともに、「仲間はずれ」や「からかい」といった穏微で精神的ダメージを与えるいじめは少なくなり、「脅し」や「暴力」といった直接的肉体的苦痛を伴ういじめが増加していくということがわかる。

(9) 大村英昭「諦観サイド・ストーリーの貧困」『少年補導』一九八九年一月号　大阪少年補導協会　二三頁

(10) 大橋　薫、高橋　均、細井洋子編『社会病理学入門』有斐閣　一九八六年　一七頁
(11) F・ハーン　野村　博訳『理性と自由』晃洋書房　一九九一年　三〇九頁
(12) 櫛島次郎『神の比較社会学』弘文堂　一九八七年　一八三－一八四頁
(13) 中野　収、平野秀秋『円盤に乗ったコミューン』光風堂書店　一九七七年　二五二頁
(14) このような校則などによる外からの拘束の強化は、逆に子供たちに「ルールのないところでは何をしてもいいんだ」という感情を根づかせ、いじめなどをより悪質・執拗なものにする可能性をも生み出す。
(15) 山口昌男『学校という舞台』講談社　一九八八年　七七頁
(16) 泉　光明「豊かな社会の乾いた心」大阪少年補導協会　前掲書　一二頁
(17) 種村完司、尾関周二、河野勝彦、亀山純正、太田直道、『「豊かな日本」の病理』青木書店　一九九一年　七八－七九頁

〔参考文献〕

(1) 森田洋司、清水賢二『いじめ－教室の病い－』金子書房　一九八六年。
(2) 阪井俊郎『いじめと恨み心』家政教育社　一九八九年
(3) 濱島　朗、竹内郁郎、石川晃弘編『社会学小辞典』　有斐閣　一九七四年
(4) E・フロム　作田啓一、佐野哲郎共訳『破壊』(上・下巻)　紀伊國屋書店　一九八三年
(5) 時実利彦『人間であること』岩波書店　一九七〇年
(6) R・ベネディクト　長谷川松治訳『菊と刀』社会思想社　一九六七年
(7) 塩原　勉、松原治郎、大橋　幸他編『社会学の基礎知識』有斐閣　一九六九年
(8) 岩波書店編集部編『ほんとうの豊かさとは』岩波書店　一九九一年
(9) 森下伸也、君塚大学、宮本孝二『パラドックスの社会学』新曜社　一九八九年

(大学院博士前期課程)